

ZYPRESSEN 春のいちれつ

ことばにはこんなことができるのだな、と改めて気づいたのは、高校生のころ宮沢賢治の「春と修羅」を読んだときのことでした。ある日、学校の帰りに横浜駅の書店に立ち寄り、なんとなく手にとった岩波文庫の『宮沢賢治詩集』。そこには、ことばを覚えていく過程のどこかの段階でいつのまにか身についたような、詩とはこういうものだ、という思いこみを超えた詩があったのです。

読んでいると、視覚的な要素と聴覚的な要素が見事に絡みあい、この一編でしかありえない、置き換えのきかない世界が立ち上がってきました。短く、まとまりのよい、一点に感情や感覚の頂点をもってくるような詩とはちがう書き方。ある意味では、ばらばらで整理されていないかたちにも見えませんでした。けれど、歩きながらメモしたことばから生まれた「心象スケッチ」だと知ると、なるほど、その

勢いと、行から行へ高まっていく熱にこそ、これらの詩の味があるのだとわかりました。

「ZYPRESSEN 春のいちれつ」とは詩集『春と修羅』の表題作に出てくる一行です。ドイツ語をふくんで糸杉の並木を表しますが、たとえば、同様の内容だからといってこれが「春の空の下、糸杉の木が並んでいる」だったらどうでしょう。似てはいても、全然ちがうものになります。詩には、そのことばが使われているからこそぴたりとなにかを表す場合があります。そのことばだからこそ出現する世界があるとは、ふしぎです。

視覚、聴覚、触覚などに働きかけることばの性質が合致をみせる瞬間。詩の一行からひろがっていく味わいは、ことばには意味や情報を伝達する道具としての使い方とはまた少しちがう側面があることを、知らせてくれるのです。それは、ものを感じとり、感じとることからまた考えていくというように、感覚と思考に、奥行きを与えるものでもあると思います。日常のことばの向こうに見える、はじめての表現や、ただ一度きりのことば。詩のことばには、生きていく、というこの瞬間を、驚きで満たす力があります。そこには心をいきいきと踊らせる力があるのです。



1974年神奈川県生まれ。詩人。早稲田大学大学院文学研究科修士課程修了。2000年「いまにもうるおっていく陣地」で第5回中原中也賞、06年「食うものは食われる夜」で平成17年度芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞。著書に絵本「うきわねこ」（プロンズ新社）、エッセイ集「孔雀の羽の目が見てる」（白水社）、「秘密のおこない」（毎日新聞社）、童話集「のろのろひつじとせかせかひつじ」（理論社）、小説「転身」（集英社）などがある。